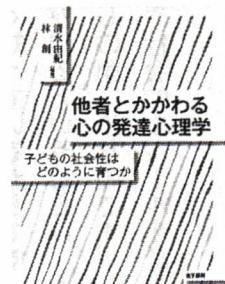


今月の本棚



金子書房
A5判
本体2,700円

他者とかかわる心の発達心理学

—子どもの社会性はどうに育つか

清水由紀
林創
編者

評者
遠藤利彦
東京大学准教授

「ヒト」を「人」たらしめているものとは何か。無論、この問い合わせに対する答は幾通りにも存在し得る。しかし、近年、この問い合わせる多くの論者の関心が、私たちの内なる本源的な社会性に確実に向かい始めているような気がする。単体としてはかくにも弱き「ヒト」が、相互につながる中でかくにも強き「人」とな

る。社会性こそが人の最大の強みであるとすれば、自ずと、その社会性を健やかに育むこと、それが発達の究極のゴールということになるのだろう。

さて、本書は、まさにこの社会性の発達に、現代発達心理学における先端知見のメスをもって、真正面から切り込んだ、大変な意欲作である。社会性の発達に関わる研究の現況を、易しく、しかしきわめて確かに説き明かしてくれる他に類例を見ない好著である。和書において、これだけ多様な視座から社会性の発達に関わる最新トピックを取り上げ、総べた書を評者は本書を描いてほとんど知らない。読者は本書を通して、子どもの社会的な心およびその成り立ちの不思議

おり、これから発達心理学にふれ、新たに何か自分でも研究をしてみたいと志向する学生にも、また、保育や教育の現場にあつて子どもの社会性の問題と日々、向き合い、それをしっかりとしつけ教育していくこうと志向する実践者にも、本書は必ずや心強い一つの道標となろう。

惜しむらくは、本書が今回、「他者とかかわる心」の内の、子どもが他者の心を理解する側面に相対的に重きを置き、子どもが現実的に他者とつながり結びつこうとする側面、あるいは種々の感情や言語を表出しながら積極的にコミュニケーションを取る側面について、やや記述が手薄になつた感が否めないことである。また、社会性の発達がいかに生まれ促進されるのか、その機序が、特に社会化の主たる担い手である養育者等の大との関係性の視座から、必ずしも十分には読み解かれなかつたということもあるのかも知れない。しかし、本書が版を重ね、改訂版や続編が出る折には、きっと、こうした課題についても確かな答が示されることであろう。評者はそれを祈念して止まない。

さあや精妙さを的確につかむことは勿論、新進気鋭の研究者たちがそれぞれに「おもしろい研究」を企図して、そこにはいかに果敢に飛び込み、さらにその先に進もうとしているのか、その熱い息吹のようないい。すべての章に「今後の展望」としてはかくにも弱き「ヒト」が、相互につながる中でかくにも強き「人」となところにも豊かな創意工夫が凝らされて